

創立者池田大作先生の日中友好実践と「4つの主義」

高橋 強

本日は以下の順番、即ち①創立者と中国訪問、②文化主義、③教育主義、④平和主義、⑤人間主義、⑥国際人と「4つの主義」の順で、お話ししたいと思います。

(1) 創立者と中国訪問

創立者池田大作先生（以下、創立者）は、1974年から1997年にかけて、10回中国を訪問されました。その中で第1次訪中、1974年5月から6月の17日間かけて行われた訪中は、その後の日中友好実践の基礎を形成したと言っても過言ではないと思います。

今年2019年は創立者の訪中45周年の佳節に当たります。その佳節に当たり、この第1次訪中を回顧してみることも意義があると思いました。そこで回顧してみると、訪中は①文化交流、教育交流を中心とした「4つの主義」の実践、②「国際人」としての行動であったことが分かります。

ここで言う「4つの主義」とは、文化主義、教育主義、平和主義、その根底をなす人間主義のことです。この「4つの主義」は、創立者が1974年9月、第1次訪中の際にコスイギン首相との会見の折に公表されたものです。実は創立者はこの「4つの主義」の構想については、第1次訪中の挨拶（1974年5月）の中で述べられています。

第1次訪中、5月29日（羽田）挨拶（駐日中国大使館、新華社、日中文化交流協会の関係者を前にして）。

「文化交流を第一義として、民間次元で、人間と人間の真実の友好を促進し、永久的な、揺るぎない平和の基盤を築き上げていきたい。特に、教育こそ新しい文化創造への一つの源泉であるとの認識に立って、意見交換できれば嬉しい。中国の青年や学生たちとの交流を、積極的に。」（『新・人間革命』20巻p21）

従って第1次訪中の経験は、「4つの主義」の形成に大きな役割を果たしたと考えています。更にまたこの挨拶は1968年「日中国交正常化提言」の具体的な実践方針であったと断言していいと考えています。以上のような問題意識に立って、本講義では「4つの主義」、「国際人」の特色

とは何かを皆さんと一緒に考えてみたいと思います。このことが未来の日中友好促進の為に、何らかのお手伝いになれば幸いです。「4つの主義」から始めて行きます。

(2)「文化主義」

最初は「文化主義」です。創立者は、『新・人間革命』20巻(p139)の中で、上海のある託児所を訪問した時のことを次のように書いています。

伸一（創立者のペンネーム）は、お礼にとピアノに向かい、「さくら」「春が来た」「むすんでひらいて」を演奏した。子どもたちはニコニコして、リズムに合わせて手や首を動かしながら、その演奏を聴いていた。心は、深く、強く、通じ合っていた。子どもたちに寄せる伸一の親愛の情を、誰もが感じ取ったようだ。「音楽は人類普遍の言語である」とは、アメリカの詩人ロングフェローの言葉である。

ここでは音楽という文化・芸術の持つ「普遍性」に注目していることが分かります。そして普遍性の効力について次のように述べています。即ち、個性豊かな独自の文化は人々の心を触発し、胸を打つ「普遍性」を有するが故に歴史上、国家と民族の壁を超えて広範に伝播していったと。私は、「個性豊かな独自の文化」は人間の本質に迫っているが故に、人々の心を触発するのだと考えます。

次に文化・芸術は何ゆえに普遍性を有するかを考えてみたいと思います。創立者は文化について次のように述べています。①文化とは、人間の心の証で、人間としての生き方、道、軌道として具現したものである。②文化とは、人間生命の具体的開花で、英知、情熱、感動を具現したもので、価値創造の活動それ自体を指す。③文化とは、調和性、主体性、創造性を骨格とした、強靱な人間生命の産物である。これらから推察するに、人間誰しもが有する「生命」の具体的開花、或いは産物であるが故に、普遍性を有するものと考えます。

次は「文化力」です。

まず創立者が強調する文化の力とは、「知り合う力」、「人間を結ぶ力」だと思います。前述したように文化の有する普遍性がその背景にあるように思えますが、創立者は文化の誕生の視点からも考察しています。文化・芸術は、①大宇宙と人間という小宇宙が「共鳴」することによって誕生するのであると捉えています。また②諸民族の文化は、その諸民族の魂が、宇宙生命の慈悲・智慧の躍動から聞き取った「内なる声」を表現し昇華したのものであるとも述べています。ここで述べられている「共鳴」「昇華」という言葉に「一体化」や「融合」といった意味合いが含まれているように思えます。

創立者の言説に基づきますと、文化力には、この「結ぶ力」以外にも以下のような力があることとなります。①「生きる力」です。創立者は、芸術の力は人を「感動」させ、その「感動」は、「生きる力」となると述べています。②「徳の力」です。創立者は、音楽の力は生きる勇氣、平和の

祈り、人間の誇りを呼び覚ます「徳の力」を持っているとも述べています。

次は「文化の骨髄」についてです。

創立者は以下のように捉えています。文化の骨髄とは、最も普遍的な人間生命の躍動する息吹が、あたかも人間歓喜の高鳴る調べが、人々の胸中に張られた絃に波動し、共鳴音を奏できるように、あらゆる隔たりを超えて、誰人の心もとらえることを指すのであります。これは、人間生命の躍動する息吹が、共鳴音の如く全ての壁をこえて伝播していくということだと思います。これまでの説明と合わせて考えて見ると、「躍動する息吹」、「人間歓喜の高鳴り」は「結び付ける」以外にも、人々に「勇氣」や「誇り」をももたらすと言うことができると思います。

次は「文化と平和」の関係です。

創立者はまず、文化の力は、人間の心の奥深くまで照らし、智慧を触発し、平和の方向へ、繁栄の方向へと歴史変革の底流を形成し、世界平和への潮流を強めると述べています。そして詩心の力を例にあげ、分断された世界に「調和」をもたらし、憎悪をつつみ、対立を克服する点を高く評価しています。

さらに先に述べた、文化は調和性、主体性、創造性を骨格とした人間生命の産物との観点から、文化は武力に対抗できることを証明しています。即ち、①人間性の共鳴を基調とする文化の性格は調和であって、これは武力の対極点に位置する。②文化交流は受け入れ側の主体性が前提であるが、武力は「抑圧の力の論理」である。③文化の基底に宿るものは創造であるが、武力のそれは「破壊」である。

次は「文化交流」の観点からの内容です。

まずは文化交流の有効性についてです。創立者は次の2点を強調しています。①文化の融合を促進、②新たな価値創造を推進です。なお、双方の文化のなかに蓄積されてきた「内なる声」の伝統的価値の再発見は蘇生をももたらすと指摘は、新しい価値創造に繋がる点で、注目に値すると考えます。文化交流を行う際のその原則として、創立者は3つの原則、相互性、対等性、全般性をあげています。この全般性についてですが、即ちもちろん交流相手の需要にもよりますが、「特定の分野だけ」の交流ではないということだと思います。

次は「文化対話主義」です。この中の“対話”というのは後述の「平和主義」とも関連します。

この文化「対話」主義の提唱は、創立者の独自の主張のように思えます。そしてその主張の主たる目的は以下の2点です。①文化相対主義の弊害の克服の為です。その弊害とは、認識的な「消極的寛容」では対立発生時に、文化相対主義それ自体が吹き飛んでしまうと、閉鎖的「排他主義」を払拭できないとか、文化の違いが自民族中心主義に転化する危険性等があるという点です。②文化交流促進、「精神のシルクロード」構築の為です。これらを背景に、創立者は「文化対話主義」を以下のように説明しています。「これからの人類は、互いに敬い、学び合いながら、共に繁栄しゆく大同の世界を目指していくべきである。そのためにも私たちは、開かれた自発的な交流を旨とする『文化対話主義』ともいべき新しい段階へ、進んでいきたいと思う」と。

次は「文化対話主義の要件」です。

まずは①内発的（自己規律・抑制）、主体的「参加者」の存在です。異文化接触は反目・嫌悪、ハレーション等を起こす場合もあるので、内発的で主体的な参加者が必要なのです。

次は②「創造的対話」を進めることです。従来は、先方は悪で、自身は善という立場にたち対話を実施し、種々の問題を引き起こしてきました。このような「善悪」二元論を克服する為に、まず「善悪不二」という発想に立ち、先方の善性へ限りなき信頼を寄せ、諦めることなく先方の善性に訴え続ける中で自己の変革も達成しながら（自己の善性も引き出しながら）、最終的には双方が自己変革を達成するという内容です。これは①の参加者の対話形式のことで、

次は③「精神のグローバル化」です。このグローバル化を進める上で、仏法の「縁起」思想や、創価教育学の創始者である牧口常三郎先生が提起する「郷土民、国民、世界民」アイデンティティーの多層化は、効果的であります。これは①の参加者の精神の状態のことで、なお詳細は、後述の「教育主義」のところでお話します。

次は『美』の価値創造との関係です。眼、耳、鼻、舌、身、意に対し快い軽快な驚異的感情を与える対象（客体）に「美」という評価を与えます。この「美」の価値創造によって、文化の内容は更に拡大され、創造性が高められることとなります。詳細は後述の「教育主義」のところでお話します。

次は「クズの文化」です。

「戦争の文化」、「差別の文化」と言った表現を目にすることがありますが、顧明遠氏は、それらは人間性を失った野蛮な文化、クズの文化であると呼んでいます。創立者は、それを乗り越える為に人間性の回復が必要であるとの立場から、人間教育の重要性を強調しています。ここには文化と教育の関連が反映されていますが、詳細は次回にしたいと思います。

(3) 「教育主義」

次は「教育主義」です。創立者は『新・人間革命』20巻（p38）の中で、上海のある小学校を訪問した時の様子を次のように述べています。

私は、二十一世紀を思う時、最重要の課題は教育であると考えております。教育こそ、人間文化を向上させ、平和社会を建設していくうえで、極めて重要な役割を担っているからです。

この段落からは、教育の重要な役割として、①「人間性豊かな」文化の向上、②平和社会の構築を挙げていることが分かります。創立者は前者の実現の為に、人格、知力、哲学を偏頗なく伸ばす人間性の全体を完成させゆく教育を提唱しています。そして「知識があっても深い人格がない、人格が立派でも実力がない、力もあり人柄も良いが、何があっても信念を貫くという哲学がない」という課題を克服する為に、提唱の内容を更に進めて、知（思考力）・情・意（目的追求のバネ）を円満に備えた“全体人間”の育成を強調しています。

創立者が次に提唱したのが、「美・利・善」の価値を創造できる人格の育成です。この人格の

育成と「人間教育」とは深い関係があります。創立者の言葉を引用すると、即ち「創価教育の目的は、美・利・善の価値を実生活のなかで創造しゆく人格を育むことである。創価教育を人間教育と表現するのは、こうした人格を育てていく作業を重視しているからである」ということになります。「人格」というとやや抽象的になりやすいですが、ここでは極めて明確です。以下、「美・利・善」の価値創造について紹介したいと思います。

まず「美」の価値創造です。眼、耳、鼻、舌、身、意に対し快い軽快な驚異的感情を与える対象（客体）に対して「美」という評価を与えます。なお「美」の価値は、感覚的価値であり個人的価値です。創価教育では、「美」の価値を評価できる力、「美」の価値を創造できる力を育むことを目指しています。

「美」の価値創造を再考する為に、提唱者である牧口常三郎先生の自著『人生地理学』中にある「審美的交渉」を見てみたいと思います。そこでは、……評価した際の心情は純潔、清浄で、詩を詠じ、歌に唱し、布帛（はく）に画き、石片に刻み……とありました。純潔、清浄は実に興味深いと思います。前述の種々の文化の力、特に「徳の力」を考える際に、重要な視点だと思いますが、詳細は次回に回したいと思います。なお「鼻」の価値創造は匂いによって人間を癒すとか、「舌」の価値創造は料理によって人間を満足させるとか等、「美」の価値創造は実に範囲が広いということが分かります。

次は「利」の価値創造です。「利」とは人間生命の伸長（開発）に役立つものを指し、その反対に生命の短縮をもたらすものを「害」と捉えています。私は「利」とは「人間生命の無限の可能性の開発」と考えています。なお「利」の価値とは個人的全人（全体）的価値であり、個人的価値でもあります。

最後は「善」価値創造です。「善」とは公益のことで、自分、家族だけの利益ではありません。従って「善」価値は、団体的社会的価値であり社会的価値のことで、ここで一つ重要な前提条件があります。それは「利」の価値創造は、最終的には「善」の価値創造と一致することを志向するということです。

次は「利自と利他」です。

ここでは利自と利他の一致について、この重要課題について、考えていきましょう。牧口先生は、この課題に関して「人道方式」、即ち利己中心を目的としないで、他を益しつつ、自己も益する方途を模索する方式を、前述の『人生地理学』のなかで提唱しています。現代社会で言えば「Win-Win」の関係ということでしょう。牧口先生の見識がうかがえます。

創立者は、この課題に対して「自他共の幸福」を提唱しています。それを支える理念として、「他人の不幸の上に自分の幸福を築かない」、「自分だけの幸福もなければ、他人だけの不幸もない」が考えられます。創立者はそれらを実現する為の行動として、慈悲の実践を強調しています。

次はこの「慈悲の実践」について考えてみましょう。

まずは慈悲（利他）の欲望、本源的欲望（人間的生を創造する方向に発動させる）、魔性の欲望（種々の欲望を自己中心的な欲望に変形、それらの欲望を支配下に置こうとする欲望）、この

3つの欲望の関係において考えてみたいと思います。

本源的欲望は、宇宙の底流からエネルギーをくみ出しています。一方、種々の欲望は本源的欲望と関係を保ち、新たな創造性を強化します。慈悲の欲望に従い慈悲の実践が強化されると、それに伴い本源的欲望は、宇宙の底流から更なるエネルギーをくみ出し、宇宙生命との合一が強化され、結果として自己中心的な魔性の欲望の冥伏を導くのです。即ち慈悲の実践強化は、「欲望の抑制」という利自に繋がるのです。

次は「小我の大我への統合」という観点から考えてみましょう。「小我」とは自己の欲望や利己心にとらわれた境涯のことで、「大我」とは宇宙大の広々とした境涯、生命のことです。小我が慈悲の導くところに従う（慈悲の実践ということ）と、小我につきまとう欲望を克服し、大我に統合・転換できるのです。ここでも慈悲の実践は、「欲望の克服」に繋がっています。

次は「菩薩の修行（慈悲の実践）」という観点で考えてみましょう。仏法の哲理によると、菩薩の実践により仏界を獲得する、即ち大我への転換が可能になるのです。その結果として人間関係、社会、自然との関係を、調和のとれた共生へと導くことが可能となるのです。ここでも「欲望の抑制」という利自に繋がるのです。

創立者は慈悲の実践についてまた、悩める人がいれば、決して見過ごさず、直ちに行動を起こす——それなくして人間主義はないと述べ、慈悲の実践そのものが人間主義であると捉えています。慈悲と人間主義については、人間主義のところで詳しくお話しします。

利他と利自の一致について、種々な説明があります。①「為人点灯、明在我前」（人の為に明かりを灯せば、我が前、明らかなり）という一節です。②不軽菩薩の実践（自己実現達成）です。③天国及び地獄での長い箸を使った物語です。慈悲の実践という利他の行為の過程で身に付く力として、欲望の抑制、エゴの克服、他者との調和力、共生力等があげられます。結論的に言えば、利他と利自の一致は可能であると言えると思います。

次は「人間の変革から社会の変革へ」です。

創立者は教育を次のように捉えています。即ち、人間の内なる無限の可能性を開き鍛え、そのエネルギーを価値の創造へと導き、社会を築き時代を決する根源の力となるものであると。個人、社会、時代を包括した広範囲のものであることが分かります。

創立者の北京大学講演（1990年）をみると、その関係が具体化されています。人間の「内面的陶冶・変革を第一義」とするが、すぐさま「経世済民」の実践に転ずるのであります。そこではまたこの倫理性に注目しています。この内面的陶冶と経世済民の一体化を表現したのとして、創立者は『大学』の次の17文字を引用しています。即ち「格物・致知・誠意・正心・修身・齐家・治国・平天下」です。簡単に説明すると次のようになります。物が格（いた）ってのち（事物の原理を究めると）知が至り、知が至ってのち意が誠になり、意が誠になってのち心が正しくなり、心が正しくなってのち身が修まり、身が修まってのち家が斉（ととの）い、家が斉ってのち国が治まり、国が治まってのち天下が平らかになる。ここで一つ連想したのは、創立者の核心的思想である「人間革命思想」です。即ち、一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国

の宿命転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする、です。『大学』の17文字の発想と、類似していることが分かります。

次は「教育の実践方法」です。

創立者は具体的な実践方法として、①教師と学生、学生と学生との間の「啓発主義」教育、②民衆に奉仕し、民衆や社会への貢献の行動の大切さを教える「人間教育」、③偉人、英雄の人間像、即ち信念の人、英知の人、勇気の人、誠実の人、実力の人を語り、人生の意味を教える教育を強調しています。

次は「感恩・報恩」です。

創立者は「人の真心に、いかに敏感に反応するか（感恩）——それが、人間教育の第一歩である。また、思いを受け止めることから、人間の交流も始まる」、

更にまた「陰で献身してくれる人びとの労苦に、いかに報いるか（報恩感謝）—その心遣いに人間主義の哲学がある」と述べています。即ち、恩を感じ、恩に報いることは、人間教育の第一歩であり、それ自体に人間主義の哲学が包含されているという考え方です。

次に「感恩・報恩の実践の効果」について考えてみましょう。結論的に言うと、それは新たな価値創造に繋がるということです。創立者は松下幸之助氏との懇談の中で次のように述べています。少し長くなりますが引用します。

「恩を知るということは無形の富であって、無限に広がって大きな価値を生む。猫に小判というが、猫にとっては小判も全く価値はない。しかし、恩を知るということはその逆で、鉄をもらっても、金をもらった程の価値を感じる。

つまり恩を知るということは、鉄を金にかえるほどのものがある」。そして、恩を感じた人は、「金にふさわしいものを返そうと考える。みんながそのように考えれば、世の中は物心ともに非常に豊かなものになっていく」（『新・人間革命』第22巻「新世紀」）

更に次のようにも述べています。「同じ千円でも、人によっては、何千円、何万円にも値する。いな、お金で計れない価値がある。その真心を感じ取る（感恩、感謝）ことです。そして、“本当にありがたいな” “申し訳ないな” という姿勢を忘れないでいただきたい」。これらを通して、創立者は、感恩・感謝・報恩を人間教育の一つとして強調していることが分かります。

次は「世界市民教育」です。

創価教育学の創始者である牧口常三郎先生は、自著『人生地理学』（1903年）「緒論」において「郷土民・国民・世界民」について述べています。即ち、アイデンティティーの多層化という視点からの世界市民教育であります。創価教育において世界市民教育は、ずいぶん早い段階から構想されていたことが分かります。牧口先生はまず一人の人間は「郷土民・国民・世界民」という位置付け及び自覚をもつことにより、正当で着実な行動や世界的競争の中で共同生活の指導を行っていくことが可能であると述べています。

次は「郷土民の位置付け・自覚」です。

人間は郷土においても、世界各地の諸現象の観察が可能であり、世界との連関性を自覚するこ

とができる。また家族、友人、隣人、学校、団体等に所属し種々の交際を通して、慈愛、好意、友誼、親切、真摯等の心情を涵養している。ここから、郷土は人間の人格形成および社会や世界との関係性を自覚する上で、重要な役割を果たしていることが分かります。

次は「国民の位置付け・自覚」です。

端的に言うと、次のように言うことが出来ます。国家のおかげで安心して生活を送れるので、自国に対して感謝はするが、偏狭な国家主義に偏しないということです。

次は「世界民の位置付け・自覚」です。

牧口先生が強調したのは、世界民は、自己の存在が、世界からの恩恵の上に成立していることを強く自覚しているという、この点であると考えます。そして牧口先生は、自身の身の回りにあるラシャの衣服、革靴、眼鏡、脱脂粉乳、綿衣等を通して、それらの生産者や運搬者の苦労等に思いを馳せています。共感、同苦、慈悲、感恩の情で世界と繋がっていることを強調したのだと思います。そして世界民の心がけとして、①国家間のように意味のない小さい事柄で争わない、②偽りの博愛に陥りやすい世界主義者にはならない点をあげています。前者は、民間の友好関係が急激な国家間の衝突の為に阻害されやすい今日において重要な指摘だと思います。後者の「偽りの博愛に陥りやすい世界主義者」とはどのように考えればいいのでしょうか。郷土民や国民との関係から考えると、郷土民として人格形成が不十分で、また国民として国家との間の権利・義務の緊張関係を十分に経験していない等、一人の人間として足場が確立されていない状況に置かれている者を指しているのではないかと思います。

ここで、「人間としての確たる足場」について、もう少し考えてみたいと思います。創立者は小状況と大状況に分けて分析しています。即ち、一個の人間は家庭、職場、地域共同体といった小状況の中で大部分の時間を過ごし、他者の顔が見えて真に交わりが成立している中で、生きる喜びを実感し、それらを心底味わう自身を発見しています。一方、個人が国家と直接向き合うという大状況は、実は僅かの時間しかなく、その上国家と対峙した個人は無力感、アノミー現象に陥りやすいという弊害が伴うのであります。

創立者はこの弊害を指摘した上で、この無力感、アノミー現象こそが国家主義の餌食となる温床を作り出してきたと、これまでの歴史を強調しています。即ち、自己の生存する社会への純粋な愛、郷土愛や愛国心が歪められ、利用され、踏みにじられ、他国民への憎悪、蔑視に変化させられ、ついには国家社会のための自己犠牲へと変質させられてきたということです。ここからは、郷土民として一個の人間として足場を確立し、世界民としてその自覚に立つことの重要性が明らかになってきます。

次は「国際人の2要件と人格教育(=人間教育)」です。世界市民教育の一側面として考えてみたいと思います。創立者は国際人の2要件として、①人間として立派な人格、②友情を構築し、友情を拡大できることをあげています。創価教育における「人格」となると、「美・利・善」の価値創造を可能にする人格ということになります。そしてその中の「善」の価値創造は、他者の利益の為の行動に繋がり、友情の拡大をもたらすことができます。このことから創価教育は正に

「国際人の2要件」を提供していると言うことができると考えます。

次は「世界市民の3条件と「美・利・善」の価値創造」です。

創立者は世界市民の3条件として、①異文化を畏れず交流し、むしろそこから何か新しいものを学ぶ「勇気の人」、②全ての人は生命次元では繋がっていることを知る「智慧の人」、③全ての人に同苦できる「慈悲の人」をあげています。

①に関して言うと、異文化交流の中から新しい価値が創造され、特に「美」の価値創造が期待できます。そしてその新たな「美」の価値創造は異なった文化から何かを学ぼうとする「勇気」を支えることになります。②に関して言うと、知・情・意を円満に備えた全本人間の育成を通して、人間生命の無限の可能性を開発する「利」の価値創造を実現しながら、人間生命の平等性や相互依存性を覚知する智慧を育むということだと思います。③に関して言うと、公益を重視する「善」の価値創造は、他者の苦しみに対し共感する慈悲に繋がっていくものと考えます。以上を通して、「美・利・善」の価値創造は、世界市民の3条件を満たす上で極めて有効であると思います。

次は「世界市民の3条件と文化対話主義の3要件」です。ここでは文化主義のところで説明した「文化対話主義」の視点から、世界市民の3条件を考えてみたいと思います。

文化対話主義の第1の要件は、相互理解、相互援助の精神を持って協力する“自発的参加者”です。この要件は、世界市民の第1条件である差異を尊重し理解しさらにそこから何かを学んで行こうとする「勇気の人」を導くものと考えます。第2の要件は、創造的対話です。即ち、自己共に内面から発現する“悪”を抑制し、“善”を高揚し、その過程で生命の修練を実現していくのです。この要件は、世界市民の第2条件である「慈悲の人」を導くものと考えます。第3の要件は、縁起思想やアイデンティティーの重層化を通して、精神のグローバル化をしていくことです。この要件は、世界市民の第3条件である生命の相関性を深く認識する「智慧の人」を導くものと考えます。

ここで追加として、スターズ博士が強調する世界市民として備えなければならない能力について触れたいと思います。同博士は次の3つをあげています。

①は差異を肯定的に理解できる能力です。これは前述の世界市民の条件の一つである「勇気の人」のことであり、②は「なぜ彼らは、そのように考えるのだろうか」と、共感できる能力です。これは世界市民の条件の一つである「慈悲の人」に当たると考えます。③は肯定的使命感に立つという能力です。「平和」を考える際、紛争を解決することに力点が置かれがちですが、その際に、他の共通の問題と共に、他者と一緒に解決に取り組もうと提案し「共通の目的観」を形成することも更に重要である。これは肯定的な使命感の育成に役立ち、その点に努力しているのが創立者であると述べています。この共通の目的観を形成する過程において、人間は生命という次元では同じ存在であるという認識が生まれていくことを考えると、世界市民の条件の一つである「智慧の人」を導くものだと思います。

次は「世界市民の育成」です。

世界市民の育成のカギとして、①「人権教育」、②「環境教育」、③「審美的教育」、④「地域

社会を基盤とするという視点」があげられると思います。ここでは特に③、④について説明したいと思います。まず③「審美的教育」です。デューイ研究者ヒックマン博士は、人間の経験の美を見極める「審美的」な領域は、「世界市民」の資質として、地球共同体へ参画するための準備として不可欠な要素であると述べています。なぜ「審美的」領域は世界市民の資質なのか、それは創立者が捉えているように、芸術や文化の持つ普遍性は人間相互の平等や共感の形成に大きな役割を果たすからです。デューイも、審美的な領域である「人々を結ぶ芸術の力」に注目していました。次に④「地域社会を基盤とするという視点」です。地域社会における人々の相互扶助の精神、身近な自然を大切にすることは、世界の平和を願い地球環境を大切にすることに通じて行くという発想がこの背景にあります。従って 地域と世界の往還作業が重要ということになります。この観点に立つと、前述の「郷土民・国民・世界民、アイデンティティーの多層化」は、この往還作業に大きく役立つものと考えます。

次は「教育交流」です。創立者は、教育交流は平等、共感をもたらすと述べています。深い次元での精神性の交流は、人間としての共感の心を涵養することができるのです。私はこの平等と共感の達成は、目的であるとも考えます。創立者は、教育の要諦は「部落意識」ではなく「人類意識」の形成にあると言われる。具体的にいうと、世界市民の一つの条件「智慧の人」を育成するということです。即ち、人類の最も深く広い共通の大地が「生命」であり、全ての人は生命次元では繋がっていることを知ることです。人類意識の形成に資するような教育交流は、必ずや平等、共感をもたらすものと考えます。なおこの教育交流は平和主義とも関連します。詳細は次の「平和主義」のところでもお話ししたいと思います。

(4) 「平和主義」

次は「平和主義」です。創立者の第1次訪中の際に、次のような一幕があります。

北京のある中学校を訪問（校庭で生徒たちが防空壕を掘っている光景）。

“この事実を、必ずソ連の指導者に伝え、平和のための道を歩むように訴え抜くのだ。中ソの争いは、生命を投げ出しても、絶対にやめさせなければならない”、大人は、その子どもたちに何を贈るのか。それは、平和である。生命の尊厳と人権尊重の社会である。未来に希望をいただける社会である。（『新・人間革命』20巻）

ここからは①創立者は戦争絶対反対論者であること、また②創立者が目指している平和な社会像は、生きる権利や幸福をつかむ権利等の「生存の権利」が保障される社会であり未来に希望がいただける社会であることが分かります。

次は「対話の力」です。

「対話の力」を通じた平和な社会構築というのが平和主義の一つの特色であると考えます。創立者は「対話の機能」として次の2点を強調しています。①対話は、新たな対話への出発、「友

情の輪」を広げる第一歩であり、②対話のなかに対立から協調への軌道が形成され、平和の懸け橋となる、です。そして対話を進める際の留意点として、①差別意識、差異へのこだわりを克服すること、②差異を畏れず、差異から学ぶこと、③相手の善性を信じ、諦めないで、相手の為に呼びかけを続け、その過程の中で、自他共の善性も引き出していくことの3点をあげています。なお③は前述の文化対話主義の中で取り上げた「創造的対話」のことでです。

次は「民衆による民衆のエンパワーメント運動（無限の可能性を最大限に引き出す運動）」です。

同運動を通して「平和の文化」の土壌を豊かにして行くというのも特色の一つです。同運動を通してまず地域社会において平和の土壌を耕し、更にそれを国際社会の平和関係構築へと漸進させようとするものです。そして地域社会での具体的な取り組みとして、①他人を大切にすることを育み（善の価値創造）、②「生命の尊厳」「人間の尊厳」への思いを高め合い、③自らの行動（対話）を通して、地域の中で友情と信頼の絆を形成して行くことを提示しています。

例えば「核の脅威展」「自然との対話展」等各種の展示は地道ですが、着実に「平和の文化」の土壌を豊かにしていると言っても過言ではないと思います。

次は「人間生命の変革」です。

永続的な平和構築の為に「人間生命の変革」を強調することも特色の一つです。なおこの変革は、前述のエンパワーメント運動とも関連します。創立者は次のように述べています。「政治や経済のみの次元では、永続的な平和を築くことはできない。生命の病、即ち三毒の濁りを取り除いていく。生命それ自体を浄化し、変革し、深く人間の生命に潜んでいる『魔』を打ち砕く」と。ここで言う「三毒」とは「貪・瞋・痴」のことで、貪とは貪欲・貪愛、瞋とは瞋恚・怒り、痴とは愚痴・無知を指します。エンパワーメント運動等を通して、三毒を克服し、生命に潜んでいる「魔」を抑制し、他者の生命の尊厳を守り、他者の人権を尊重する心を引き出そうとするものです。そして継続的で安定的な平和な状態を構築しようとするものです。

次は「人間教育」「文化交流」との連携です。この点も大きな特色として考えていいと思います。これまで述べてきたそれぞれの特色を、更に発揮させて行く為には、①「核の力」よりも偉大な「生命の力」をいかに開発するか、②「核の拡大」よりも強力な「民衆の連帯」をいかに拡大するかが重要となってくると思います。前者に関してですが、「美・利・善」の価値創造を可能にする人格の育成、「慈悲の実践」、「感恩・感謝・報恩の実践」等の人間教育は、無限の潜在的可能性の開花を導くことができると考えます。特に生命に開花させた調和性・創造性・主体性は、武力に対抗し平和に導くのであります。後者に関してですが、文化の有する結合力・先導力は、民衆と民衆の出会い・結合のうえで大きな役割を果たしていくものと考えます。

(5) 「人間主義」

次は「人間主義」に移ります。第1次訪中の中で次のようなシーンがあります。訪中の同行メンバーとの会話です。

「どこの国の人も、みんな同じ人間だ。誠実に、ありのままに接していけばいいんだ。話し合えば必ず心は通じ合えるし、わかり合えるものだよ」。(略)人は皆、同胞であり、互いに理解し合えるという信念と、万人を包む笑顔にこそ、人間主義の証がある。(『新・人間革命』20巻)

ここに人間主義の一端が現れていると思います。話し合えば必ず理解し合えるという信念、他者に対する思いやりの背景は、人間の善性に対する強い信頼があるように思えます。創立者も第1次訪中の中で、戦争回避への確信を表明した際に、人間を信じているが故に、対話という生命の共感をもって人間の良心、真心を引き出し、戦争は必ず避けることができる(『新・人間革命』前掲)、と述べています。

次は「思いやり」「真心」の授受の観点から人間主義を考えてみたいと思います。第1次訪中の中で次のようなシーンがあります。

総理は重い病をかかえながら、伸一の訪問に対して、こまやかな気遣いをしてくれた。食べ物好みや、喫煙するかどうかなども、人を介して尋ねた。伸一は周総理の思いを知り、「そのお心だけで十分です。一切、特別なことはしていただくなくて結構です」と答えた。伸一は、この李先念副総理との会見にも、周総理の深い配慮を感じた。“自分の代理として語り合ってください”との、総理の真心が、痛いほど感じられてならなかったのである。(『新・人間革命』前掲)

創立者はその時の感動、感謝の気持ちを忘れず、その後一貫して日中友好促進の実践を展開しています。ここからは創立者がいかに他者に対する「思いやり」「真心」及び「感恩」「報恩」を重視しているかが分かります。創立者は、他者に対する「思いやり」(慈悲)から発する「万人を包む笑顔」にこそ人間主義の証があると述べ、また「感恩」「報恩」は人間性の精髓であり、人間の正しい道であると評価しています。さらに「陰で献身してくれる人びとの労苦に、いかに報いるか(報恩・感謝)―その心遣いに人間主義の哲学がある」とも述べています。

次は「慈悲の発する3つのメッセージ」です。

①は「人類の宇宙的使命は慈悲にある」という使命論です。即ち、万物を育み、繁栄と幸福に導く慈悲の行動は、宇宙より人類が託された使命であるということ。人間はその自覚を持ちそれを達成する中で「生きる意味」を感じるのである。さらに人間を尊重しゆく「共生の文化」を養い、地球環境と共栄しゆく「自然観」を培うことができる。そして「分断」を「結合」へ、「対立」を「融和」へ、「戦争」を「平和」へと人類史の軌道修正を導くことができる。これらは慈悲の実践を強化することに繋がると考えます。

②は「ヒマラヤのごとく悠然と」です。確立された「不動の自己」(大我)こそが、大慈悲の基盤となることから、これは境界論です。これは慈悲の実践に大きな目標を与えると考えます。

③は「自他ともの幸福を目指せ」という行動論です。創立者は、釈尊の次の言葉を引用し、行動論に言及しています。「人間、『自分』ほど大切なものはない。ゆえに、『我が身に引き当て』、『他

者』を大切にすべきである。相互に『他者』の存在、相手の立場に立ち、共感することこそ慈悲の第一歩である、「汝の心のうちに『他者』を復活し、自他ともの幸福を満喫せよ」と。この行動論には、慈悲の実践の内容が明確に現れているように思われます。

次は「人間主義の根幹」です。これはあくまでも私論ですが、人間主義は以下のような立場に立っているものと考えます。①万人の生命の中に尊厳なる「仏性」が存在している。②貪・瞋・痴に支配された自己の克服は可能である。(九識論、十界論) ③万物は一つの生命体である。(諸法実相)。④人間の一念の変革は、他者、社会及び自然の変革に繋がる。(一念三千論)

それでは次に、前述の①の立場、「万人の生命の中に尊厳なる“仏性”が存在している」に基づき、「仏性」を「根本規範」とする「人間主義」を考えていきたいと思います。まず仏性とは何か。「仏性」とは、私の性分、理想的人間形成の種子、無限の潜在的可能性を指し、平等に具わっています。また「仏性」とは、金剛にして不壊で清浄にして無垢なる本質を有し、「自らの主」として人生の幸福を決定づける機軸でもあります。しかし日常的には、様々な邪見、偏見、謬見（あやまった見方）等によって、煩惱の奥深く埋没しています。

次は「規範性」と「内発性」です。仏性に対する確信がともなう一方、「規範（仏性）」の正しさを常に問いかける内省（「謙虚さ」、「寛容さ」）の眼があつてこそ、人間は生き生きと創造の営みを続けられる。ここで言う「正しさを常に問いかける内省」とは、その規範の正しさに基づいた行動であるかどうかを振り返ることであると考えます。そして「規範性」とこの「内発性」との相互作用によって、優れた人格的な力が涵養されていくのです。従って人格の練磨も人間主義の一つであると考えます。なお涵養された優れた人格的な力は、前述②の貪・瞋・痴の克服に繋がると思います。

次は、仏性は全てに平等に具わるという「平等性」です。この立場に立てば、人間同士、自然、宇宙は全て平等であるという全体観、包括的世界観が形成される。そしてそこに、生命が、世界から宇宙へと「普遍性」を獲得し、拡大しゆく姿も見出すことができる。結論的に言うと、仏性の「平等性」は、人間・自然・宇宙が共存し、小宇宙と大宇宙が一つの生命体として融合しゆく「共生」の秩序感覚、コスモス感覚を導き出していると考えます。ここで共生について少々説明したいと思います。「共生」は仏教で言うと「縁起」（縁に因りて起こる）ということになります。縁起の立場に立てば、人間界であれ、自然界であれ、単独で生起する現象は何もなく、万物は互いに関係し合い、依存し合いながら、一つのコスモスを形成し、流転していく、と観ずるのです。以上のことから、万物一体の生命感覚を持つことも人間主義の一つと考えます。これは前述の③に繋がると思います。

次に、生命の尊厳性について、創立者はどのように捉えられているかを紹介したいと思います。創立者の見解は、「生命」は①「地球」よりも重く、「人間」は「国家」より大きく、また②大宇宙と一体の広がりを持ち、最高に尊貴なものであり、尊厳のあるものだ、というものです。ここからは、創立者は「生命至上主義」及び「宇宙的ヒューマニズム」の立場に立っていることが分かります。

ここで後者の「宇宙的ヒューマニズム」の特徴から考えてみたいと思います。創立者は、「宇宙的ヒューマニズム」は、より深い次元から「包括的」であらゆる他者を受容する「寛容」が特徴であると捉えています。同ヒューマニズムによって、人間を宇宙、自然と共生させながら、すべての生命を慈しむ方向に導き、結果として、従来のイデオロギーの弊害、即ち「二元対立的」傾向、そしてそこから生み出される他者を「差別」し「排除」する傾向を克服しようとしているのです。

次は前者の「生命至上主義」を考えてみたいと思います。ここからは、①存在そのものが最高で尊貴であり尊厳ある側面と、②生命のもつ無限の可能性が尊貴であるという側面と2つの観点があるように思えます。この“生命のもつ無限の可能性”について、創立者は以下のように述べています。

「最も強いのは人間の心で、その心から、無限の智慧も、創意工夫も生まれる。心が敗れなければ、どんな窮地に立たされても絶対に負けることはない。人生でも、社会を改革する戦いでも、敗れる前に、まず心の敗北があります。怠惰、臆病、油断、焦り、あきらめ、絶望——これらが精神を蝕み、結局、敗れてしまう。だから、心を鍛え、強くしていかなければならない。そのために哲学・倫理・道徳がある」と。(『新・人間革命』20巻)

このような「人間生命のもつ無限の可能性」が背景にあるが故に、創立者の人間の善性に対する信頼は絶大なものであると考えられる。なお「宇宙的ヒューマニズム」の立場に立つと、①人間生命のもつ無限の可能性はまさに「宇宙大」、②生命の尊厳性も「宇宙大」ということになると思います。

(6) 国際人と「4つの主義」

次は「国際人と『4つの主義』」です。創立者は、国際人の2つの要件として、①人間として立派な人格、②友情を結べて更にそれを拡大することを挙げています。第1次訪中の中で次のような場面があります。

「どこの国の人も、みんな同じ人間だ。誠実に、ありのままに接していけばいいんだ。話し合えば必ず心は通じ合えるし、わかり合えるものだよ」、真心をもって真実を語れば、そこから友情は深まる。(『新・人間革命』20巻)

誠実と努力と智慧によって、友誼の道は広々と開かれる。「秘訣などあるわけがない。私は真剣なんだ。(略) その真剣さこそが、智慧となり、力となるんだよ」。(『新・人間革命』20巻)

友情や友誼を拡大する上で重要な人間性として、「誠実」「真心」「努力」「智慧」「真剣」等が強調されています。これら豊かな人間性の開発は人間教育の一つの重要な目的でありました。教

育主義の一つの特色です。また前述の人間主義に立脚すると、人間性の豊かさは「宇宙大」に広がる故に、「誠実」「真心」「努力」「智慧」「真剣」等を骨格とする人格の向上は際限がないということになります。

更に次のような場面があります。

一瞬一瞬の出会いを大切に、友情を結ぶために全力で対話した。(『新・人間革命』20巻)

伸一は、この機会に、未来にわたる強い友誼の絆を結ぼうと思い、どこまでも誠実と情熱を尽くし、魂と魂の触れ合う対話を続けた。(『新・人間革命』20巻)

「一人でも多くの人と対話し、友好を結びたかった。八億といわれる中国人民である。一人ひとりとの対話は、あまりにも小さなことのように思えるかもしれない。しかし、一滴の水が大河となるように、すべては一人から始まるのだ。一人から開けるのだ。ゆえに、一人を大事にすることだ」。(『新・人間革命』20巻)

これらの行動に共通点が見られます。それは対話を通じた友好、友誼の拡大です。これは「対話の力」に注目した平和主義と密接な関連があることが分かります。なお友好、友誼の拡大には文化の力を導入することが有益であると考えます。なぜならば、文化は普遍性を有し「結び付ける力」が顕著であるからであります。文化主義に立つことにより、友好、友誼はその空間を拡大することができるのです。

そろそろ終了の時間になったようですので、本日の講義はここまでにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。